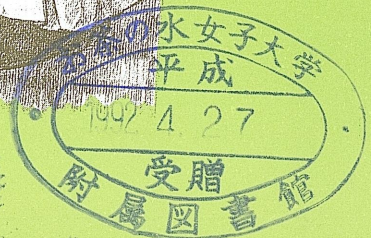


家庭・保育所・幼稚園

幼児の教育

1992 5



第91巻 第5号 日本幼稚園協会

大場幸夫
名倉啓太郎
村田保太郎
森上史朗

編著



障害をもつ子の
保育に必要な配慮は
なにか？

豊富な事例、適切な助言、保育現場に役立つ実践指導書

障害児保育実践シリーズ

全6巻

障害をもつ子の保育に必要な配慮はなにか？ いま、保育現場では、望ましい障害児保育について真剣に模索されています。症状も程度も多岐にわたる障害児の姿を十分把握し、一人ひとりの個性を見きわめて保育することが大切です。このシリーズは、たんなる理論書や研究書でなく、保育現場に生かされることを目的とした実践指導書です。

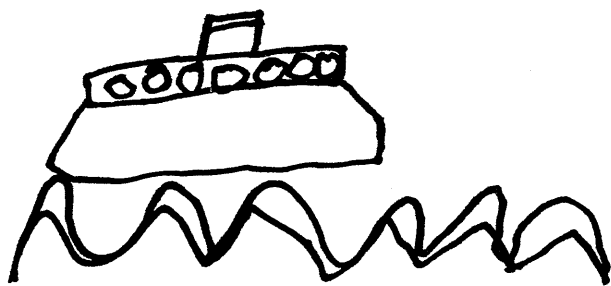
第1巻 自閉的な子どもと保育	第4巻 病虚弱・肢体不自由の子どもと保育
第2巻 発達に遅れのある子どもと保育	第5巻 心に問題をもつ子どもと保育
第3巻 ことば・聞こえ・見ることの障害と保育	第6巻 障害児保育の基礎

A5判・セットケース入り・各巻平均264頁・セット定価11,124円(税込)

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社総括部(03)3292-7783(代)にお問い合わせください。

キンダーブックの
フレーベル館

幼見の教育



第91卷 第5号

幼児の教育 目次

— 第九十一巻 第五号 —

© 1992
日本幼稚園協会

へ巻頭言▽伝統と進歩……………	千羽喜代子……………(4)
子どもが危ないときを支える……………	津守 真……………(6)
特集へ走る▽	
走る爬虫類……………	千石 正一……………(11)
「走る」という言葉からの連想……………	岩上 節子……………(14)
走運動のキック力について……………	松尾 彰文……………(17)
時をのせて都電がはしる……………	大多 和家……………(22)
私と子どもたち……………	杉野 恵……………(24)
走る玩具スクルマの魅力……………	村松 明子……………(27)



倉橋惣三の保育者理解(上)……………児玉 衣子…(30)

保育への視座(3) 若い保育者の方々へ……………河邊 杲…(39)

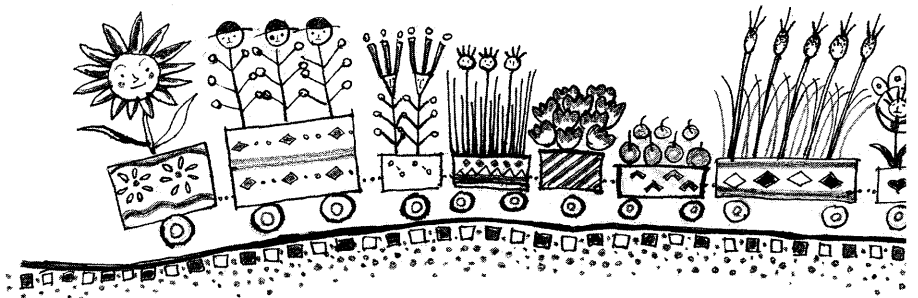
幼児の笑いとその保育における意味(3) 三歳児の笑い……………友定 啓子…(44)

Sちゃんが動き出すまで……………守永 英子…(52)

ある日の育児日記から(17)……………佐藤 和代…(57)

若いお母さんたちへ 大地と共に(下)……………川上 美子…(58)

表紙・平野 清／扉題字・堀合 文子
扉カット・お茶の水女子大学附属幼稚園園児
カット・福田 理恵
編集委員・本田 和子／吉岡 晶子・岩上 節子
編集部・大沢 啓子



伝統と進歩

千羽喜代子

本年五月十六日・十七日の両日、第四十五回日

本保育学会がお茶の水女子大学で開催される。四十五年前の昭和二十三年十一月二十一日の日本保育学会設立、第一回大会と重ね合わせたとき、私たちはそこに何を見出すであろうか。

学会設立の主意書には、これまでの我が国において、保育についての理論的な研究は、ほとんど未開拓であり、よって、保育に科学的な基礎をもたせなければならぬこと、そしてその目的は年若い保育者を育て、正しい姿において乳幼児保育

を展開させることにある——とされている。

四十五年後の今日、保育学会主意書の目標とするところは大きく実った。実践科学として、学問性の薄い複合領域として扱われてきた感が強く、だからこそ保育学に科学的な基礎をもたせるべく模索して、今日の成果をみるにいたったのである。この成果の蔭には、現存する、また故人となられた先輩の諸先生の貢献を忘れてはならない。

合計特殊出生率一・五四という少子化時代に生きる子どもたちにとって、いろいろな意味で、経

済的に豊かな環境の中にあることを幸せとするかはともかくとして、現代社会では自己選択や自己決定能力が要求される。これらの能力は幼い時期の対人関係、例えば、親や保育者や友だちとの人間関係を通して育てられる部分が大きい。

保育学のねらいが乳幼児の健全な人間形成の基礎づくりにあるとき、社会に適應するのみならず、「創造性」の要素が求められる。

しかし、この創造性の要素は今に限ったことではない。大正時代において、一人の保育者、岡 政女史が、岡山において、東京在住の倉橋惣三先生の保育理念を現場で実現させるために、幾度も連絡をとりあいながら、奮闘なされた記録に、幼児の創造性を育てることがねらいとしてあげられている。

今日、私たちが新しい保育を求めて進歩的であるかのような錯覚をもつが、それは過去において、そ

れを追い求めた保育者の一途な伝統の延長線上にあることを知らされるのである。

また、保育に関して新しい試みをしたとしても、それは一人の者の努力の成果が広く保育界に普及してきた場合もある。私たちが新しいと思っっていることが、意外に過去の先達者によって試みられていることが多い。

乳幼児の保育は古くて新しい営みである。

保育の進歩とは何をさしているのだろうか。保育の科学化が進歩であるというならば、その一方においては、人間が人間を人間として育てている以上、保育の心、保育のエスプリを見失わない保育者・研究者の自己反省が常にともなうことが必要となるであらう。

(大妻女子大学)

子どもが危ないときを支える

津守 真

子どもは心身ともに傷つきやすく、一歩間違えばその存在がこわれてしまうかもしれない危なさをいつでも内に蔵している。このことをとくに気付かせてくれたのは、私の娘が第二子出産のために一家で私の家に滞在していたときのことであった。

子どもにとって「自分の家」の大切さ

丁度正月で三歳になったその子は、私共と以前から親しかったが、今回はいつになったら自分の家に



帰れるのか子どもには分からない程の長い滞在で、その子にとっては不安なことが多かったようである。体も心もよく動くその子は、大人のことはをすぐに取り入れてペラペラしゃべるが、発音も不確かである。「ブッシュ大統領がね、お腹が痛くなったの」と、朝の食卓でまじめな顔をして言い、大人が笑うと一緒に笑う。両親のみでなく、祖父母、叔母などが一緒に食卓を囲むから、どの人にどういふ話題で話せばいいかと八方気を配りながら、その子

は大人の会話に参加しようとする。うっかり突き放したらことばをしゃべるのもやめてしまうのではないかとの危惧すら私共は感じた。一緒に寄り添って長い時間を過ごしていると、その心は揺れ動いて不安定で、いまにも崩れてしまいそうなことが分かる。

私共の家にきた翌日の夕方、私はこの子をつれて郵便ポストに年賀状を出しにいった。はじめての道になると、「だっこ」を要求し、「おうちにかえろ」と言う。おうちと言っても、自分の家と祖父母の家とがごちゃまぜになっているみたいであった。家にもどるとすぐに、その子はトースターにつきみきをつけて、スイッチを回して焼き（もちろんコンセントははずしてある）、つきみをひとつずつ皆に配って歩いた。夕暮れの薄寒くなった気持ちを、トースターの遊びによって温めているように思えた。一時的とはいえ自分の家を失った喪失の心を、私共はどうやって温めてあげられるかを考えた。トースターの遊びの後、この子は父親の腕に抱かれ

て眠った。

その後、この子は毎日一度、「自分のおうちに帰る」と口に出した。それは泣いて主張するのではなく、控え目に口にした。感受性の強いこの子は、言ってもどうにもならないことを承知しているのに、それだけに、馴れ親しんだ場所に対する思いの深さが察せられた。

怒り易く泣き易いとき

私共の家に来た当初はとくに、この子は一寸したことで泣いたり怒ったりすることが激しかった。いろいろ書きとめられないくらいその連続だった。たとえばコップに牛乳をいれてのみたいという。私が牛乳パックを斜めにして注ごうとすると、私ではだめだ、お母さんでなければいやだという。母親がやるうとすると、自分でやるうとしていたのにと怒る。よほど自分を正面から押し出して主張しなければ子どもは自分自身を支えきれないみたいであっ

た。無理難題がつづく、大人もつい怒りたくなるが、怒り易く泣き易いというのは、子どもの心の不安定さの表現であることが私共にはよく分かった。

場所のことだけではない。赤ん坊の出生についてもである。子どもは話では聞かされていても、赤ん坊とはどういうものなのかを体では分かっていない。母親が入院するという異変がいつか起こるらしいとその子は感じているが、実際にはどうということなのかの体験もない。

食事のとき、排泄のとき、入浴のときなど日常生活の場面で、この子は無理を言い、自己主張し、大人を困らせた。そんなとき、私の妻は、「この子はいまにも倒れそうなんだから」と皆に言い、「力で勝つなんて下品なことをしてはいけない」と大人たちを励ました。そして私共はこの子が納得して次のステップに進むようにと努めた。子どものあやうさを支えるというのは、大人の側から一方的に押し切るのではなく、不安定さに揺れている子どもの心の

側に立つことである。大人になると、危ない時を自身で支えることが可能になるが、子どもは日常の中で大人に支えてもらわなければ、自分で自分を支えることがむずかしい。

第三者からみたら「わがまま」にさせていると見えるかもしれない。けれども私はいろいろの子どもの保育に何十年もふれてきて、もしかしたら崩れるかもしれない、あるいは頑かたくないでてしまうかもしれない子どもの必要にこたえることを通してであると思う。それは決して「わがまま」にさせる結果になってはいないし、後になって何度も、そのようにしてよかったと思わされている。

ワイングラスの遊び

何をしてあげても怒ったり泣いたり、困難な応答をつづけた後に、その子の内心を表現する遊びがあらわれることも、私がこれまで保育の中で何度も見

てきた通りである。

ある晩、夕食のあと、赤ちゃんの写真のついた「ベビーソープ」の洗剤の箱を見つけたその子は、それを流しに全部あけて泡を作って遊んだ。ひるま母親のお腹の上にとびおりの遊びをして母親に叱られたとのことで、まだ見たことのない赤ん坊の存在に対する不安が「ベビーソープ」によって呼び起こされたのだらう。長い時間をかけて泡を作るうちに、その子は「かなしいよ」と言って、えんえん泣いた。そのうちにふと戸棚の中のワイングラスに目ごとまり、次々にそれをテーブルの上に並べた。私の家のワイングラスを九個全部出し終えると、次に、その子は、上等なコーヒー茶碗を十個全部出した。食卓のテーブルのへりに沿って丸く並べたときには、とても綺麗で、本人も私共も思わず見とれた。それからその子はソーサーを出してひとつずつワイングラスの下に敷き、それからコースターを置き、最後に上等な皿をワイングラスとコーヒー茶碗の上に重

ねた。皿、ワイングラス、コースター、ソーサーと四つの組が並んだ。外国の風景のプリントのコースターは、オーストリア、アメリカなどと言い、ポインセチアの絵のついたコースターは、メリークリスマスと言う。こういう遊びになると、いろんな辛いことがあっても、自分の本来の姿を発見したみたいで、この子はすっかり落ち着いてしまう。

こわれ易い上等なワイングラスをテーブルのへりに不安定に並べたときに、自分はこんなに不安定でこわれ易い状態にいるのをようやく支えているのだよと、この子は私共に対して表現しているように思えた。

更にもうひとつ付け加えるならば、この子は、切符とお金というように、何かを対にして揃えるのが好きである。描画も、小さな円をいくつも描き連ねるが、ひとつずつ名前を言いながらかいてゆく。線の動きを楽しむのではなく、描いた円と物を対応させる知的な関心で、この子どもの本質的な特長のひ

とつである。

養護学校の保育の場て

この年齢の子どもの不安定さと危うさを、この子のことで身をもって感じていたので、その時以来、私の学校の保育現場に出たとき、ひとりひとりの子どもに対する私の接し方が変わってきた。

数か月前に二番目の子どもを生んだひとりの母親が、四歳になる上の子を送ってきたとき、私はトランポリンの上で子どもをおぶって跳びながら、「よくこの期間をもちこたえて過ごしましたね」と声をかけた。その母親は、「先生にもそのことが分かるようになりましたか」と言って笑った。この子は赤ん坊の授乳のときには傍で待っているが、終わると母親にはげしく抱かれたがるという。父親と出かけても、すぐに怒ったり泣いたりする。それで今日はベビーシッターを頼んで、母親が上の子を連れて来た。これからしばらくそうしてみようと母親

は私に語った。親はいろいろな工夫していることが私には身に沁みて分かった。

同じ日に、もうひとりの子どもがひとりの職員と公園にいった。その子は公園にいくといつて外に出たのに、入口までくると別の方角にいったり、学校にもどってきても中に入りたがらず、また公園にいったがったり、公園ではどうしても服を脱ぎたがって大人を困らせ、その職員はへとへとなつて帰ってきた。その職員の話によると、正月に母親と妹が実家にゆき、その子は父親と留守番をしていた。その間、あっちに行きたいと言ったり、怒り易く、父親を困らせたという。

子どもが怒り易く泣き易いとき、そして殊更に自分を主張し大人を困らせるチャンスを見つけようとしているとき、子どもの内心は寂しかったり、悲しかったり、不安定で、家庭でも、幼稚園・保育園・学校でも、特別に大人の支えを必要としているときである。

(愛育養護学校)

走る爬虫類

千石 正一



もはや一昔も前だが、エリマキトカゲが大ブームになったことがある。頸のまわりの、舌骨によって支えられたフリルを拡張、二本足で走る。あれである。マスコミに登場したそもそものきっかけは、「何か面白い動物を紹介して欲しい」という漠然とした要求に対し、オーストラリアに取材に出かけるTVディレクターにむかって、「コアラのついでにこういう動物も撮影してくれば」と提言したことで

ある。かくてエリマキトカゲは私の監修する「わくわく動物ランド」という番組のオープニングをつとめることになる。その後は視聴者からのアンコールによって同番組にも再三登場したが、着目した他番組やCMにも登場するところなり、空前のブームとなっていた。私自身はちょうどその頃アメリカにいたし、アイデア提供だけで他には何も関係なかったが、帰国して驚いたことには、一人歩きして、と

んでもない情報が乱れ飛んでいたことであつた。

では何故それが受けたのだろう。外観的なひょうきんさは当然として、意外さが大きな要素になっていることは考えられる。コアラとかラッコとかパンダとか、ある意味での人間臭さを売り物にして人気物にしたてあげられた可愛い動物というのは、ほとんどが哺乳類なのだ。爬虫類の例は他にない。トカゲが走るのはいかにも可笑しかったのだ。

トカゲだのヘビ・カメ・ワニといった動物群は爬虫類とされ、ことばの上からも「這う」というイメージが強い。欧米の各国語の名称にしても、爬虫類は「這うもの」という語源が多い。口腔に虫の這い跡の如くできるヘルペスと語源を一にしているのである。這うというのは腹を地につけ伏して行くことだろうが、機能する四肢をもたないヘビが這うしかなないのは止むを得ざるところとして、四肢のある爬虫類というのは、実際には、なかなかどうしてよく走るものがある。二本足で立って走るトカゲにし

ても、アガマ科・イグアナ科・テヌー科等に様々なものが出て、ひとりエリマキトカゲの専売特許ではない。日本（琉球列島）にさえ、しばしの間なら二本足で跳ねるキノボリトカゲがいて、これはエリマキと親類のアガマ科に属しているから、顔つきも似たようなものだ。エリマキトカゲだけが受けるというのは、私としてはむしろ意外であつた。

キャラクターとしてならエリマキより強烈と思えるのが、バシリスクである。中米産のイグアナ科のこのトカゲは、雄鶏とガマとの交雑である伝説の怪物に名前の由来がある。異様なトサカを持つ竜のようなこのトカゲに接した白人が、「これこそ神話のバシリスクの正体に違いない」と思つても確かに不思議はない姿をしている。怪奇な形に似あわず（爬虫類にはそういうのが多いが）果実や昆虫等を主食にしている温和なトカゲである。水辺の樹上に主に暮らしているが、身の危険を感じると、後肢のみで立ち上がって走り、水場に行きあうと、そのまま水

面上を走り去る。右足が沈まないうちに左足を出す、というやり方である。忍術か魔法のようだ。私はコストリカで、多数のバシリスクが一斉に水面上を走る光景を目前にして呆然とした。現地ではその奇跡に因んでこのトカゲを「キリスト」と呼んでいる。

ワニというのも違うものだと思われる。水中は巧妙に（少なくともヒトよりは）泳げるにせよ、陸ではどてっと腹を投げだし、そのままずるとすべって水に入るだけ、というイメージが湧くのではなからうか。しかし実際にワニが這うところを見た日本人はそう多くはなからう。ワニは、陸では、状況に応じて、這い・歩き・走るのである。一般的には歩く。腹を地面から離し、堂々と体を持ち上げて歩く。沼地等の地盤の柔らかい所では、接地面積を多くし、エネルギーロスをしないように、這う。雪上での移動を考えれば、一回一回足を潜りこませ

てもかくより、すべって移動するほうが合理的なのはおわかりになる。ワニは短距離のこの「腹すべり」もする。

さらに、ワニは走る。体が瞬間的には完全に宙に浮かぶから、跳ぶといってもよいかもしれぬが、ギャロップをするのである。馬の最も速い駆け方であるギャロップだから、ワニとても非常に速い。瞬間的には時速四〇キロメートルにもなる。カール・ルイスだとて絶対に追いつけないのである。ワニがそんなスピードを出すなんてのは、ふつうの想像の域を越えているのだが、事実。我々は爬虫類のことを、不様だの何だの、少々見下し過ぎているのである。よく調べてみれば、我々には及びもつけない能力をいくつも潜在させているだろう。理解できない、異質なものを排除するのは、なにものに対しても、とってよい態度ではない。

（財団法人・日本野生生物研究センター）

「走る」という言葉からの連想

岩上 節子

保育をしていると、「子どもって、歩けないので

はないかしら」と思うことがあります。構造的に向いていないというか、適していないというか、いわゆる頭でっかちでバランスが悪いみたい。本人は歩くつもりで、とりあえず一歩踏み出してみているのに、どうも体が不安定で、いつの間にかもう一歩でている様子。一歩一歩、一生懸命バランスをとりながら、しかも、けなげに前に進もうとすると、大人の言うところの「走る」という状態になってしまうのではないでしょう。子どもにとっては、「走る」があたり前で、「歩く」は努力なのだと思います。

す。

でも大人は逆。「歩く」があたり前で、「走る」は努力、もしくは非常事態。例えば、健康のためのジョギング、通勤時のかけこみ乗車や席とり合戦、にわか雨等々。その「走り」に共感できるものときかないものがありますが、一日を振り返った時に、「あれ、今日、一回も走っていない。」と思う日は、元気が足りない気がして、寂しいように思います。とはいえ、もしも、人間が皆「走って」生活していたら、危ないやら落ち着かないやらで、さぞかし生きづらいだろうと思うので、やはり、日常生活では



「歩く」方がより人間らしいということになるのでしょう。だから、転がるように歩いている、というか走っている子どもの姿がどんなにかわいなくても、人間社会で暮らしていく以上、「歩く」能力を獲得することは、子どもにとって、必要不可欠なことだと再認識するのです。

ところで、私が教師として、子どもの生活にかかわるにあたって大事にしていることを、「走る」という言葉をキーワードにして捉えなおしてみると、二つの側面から考えられます。

(1) 走ることによる「走る」の意識化

△事例①▽四歳児

運動会を経験してから、時々思い出したようにリレーを楽しむ子ども達。三学期になって、他の遊びをしている子ども達からも「がんばれー」などと声援がとぶようになりました。とてもいい雰囲気です。担任としてもうれしく思っています。ともすれば、

けんかやいざこざに発展しがちな子どものあり余るパワーが、楽しい形で燃焼されて、その子なりの充実感や達成感を味わってほしいと願っています。

△事例②▽四歳児

遊びのなかで、突如始まる鬼ごっこ。二三人でするほのぼのとしたものから、先生も混じってのスリリングなものまで、遊び方はいろいろですが、何もかも忘れて走りまわっているうちに気持ち解放されて心の中がすっきりしてしまいます。友達や先生とのふれあいを素材に楽しめるといふ点からも、うれしい遊びのひとつです。

この二つの例では、子ども達は、今、自分は「走っている」ということを自覚しています。つまり、日常生活場面で走りがちな子ども達が、自ら「走りたい」「走ろう」「今、自分は走っている」と意識することによって、「走る」を子どものコントロール可能なものに変化させていると捉えられるのです。

〔2〕走らないことによる「歩く」の意識化

現在私の勤めている幼稚園は、三学年六クラスが一列に並んでいるという園舎の構造のため、廊下は五十メートル走ができるのではないかと思う程まっすぐに長くのびています。大人である私ですら、走らないで過ごすには、相当の意志の力と精神的かつ時間的ゆとりを必要とします。それでも、限られた空間であることに変わりはないので、折につけ廊下を歩くように子ども達に伝えることをこころがけています。「どうぞ走って下さい」と誘いかけてくる廊下という場所で、自然にしていれば走ってしまう子ども達が、どんな風ががんばっているかというところ……。

〈事例〉

とにかく一生懸命歩こうとするあまり足元ばかり見つめて、いつの間にか手が汽車のように動いている子どもがいるかと思うと、その子どもの横を考えなしに走っていく子が、また別の子に「廊下は走っ

ちゃいけないんだよ」と怒られていたり、頭がいいのか運動神経がいいのかよくわかりませんけれど、誰に言うともなく、「走ってないもーん」と叫びながら、笑いながら、廊下をスキップしていく子どももいます。かなりの長い距離をスキップで行き来する姿などは、あきれるのを通り越して、ほほえましくさえ思えてしまいます。特に、最初ほうまくスキップにならなくて、ギャロップのような感じだったのが、気が付いたら上手になっている様は、ちょっと感動的だったりします。

この例では、必ずしもすべてが子どもの中から生まれてきたものではありませんが、「廊下を走ると危ないから歩いた方がいいと思う」という教師の働きかけを、子どもが自分なりに受け止めて、「あつ、今自分は歩いていないんだ」ということに気付き、それぞれが、それぞれに、今できることを試しながら、「歩く」と「走る」の違いを意識し、その間をさまよい、自分の意志で自分を操ろうとする試みと

いえるのではないのでしょうか。

*

[1]の側面から考えたことにしろ、[2]の側面から考えたことにしろ、大人から見れば、他愛のないことにすぎません。でも、大人にとってあたり前になっている身体の動きを子どもが獲得した瞬間の感動は、とても大きいと思うのです。今回は「走る」という言葉からの連想でつらつらと書いてみました

走運動のキック力について

松尾 彰文

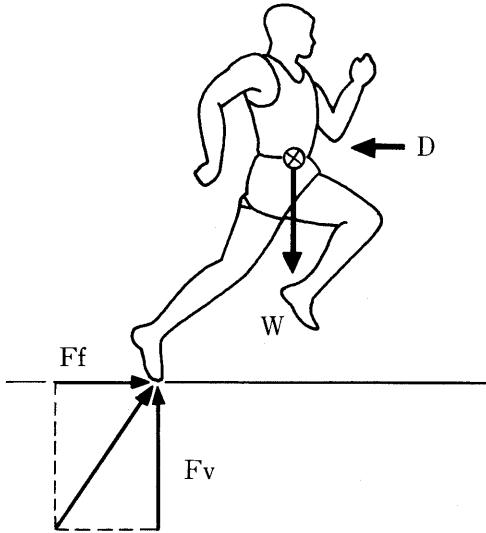
が、「握る」手に自由自在に力を入れられるようになった瞬間や自分の声が「歌」になった瞬間の、子どもの驚いた様な、うれしい様な表情を見て、大人にとってのあたり前があたり前になるまでの道のりを想い、自分も子どもも「今の自分」を大切に、素直に、生きていきたいと思うのです。

(お茶の水女子大学附属幼稚園)

走運動は地面を強く蹴ることにより発現する移動運動である。図1に疾走時に身体に作用する力を示した。身体は足が地面をキックする力の反作用とし

て地面からキックした力と同じ大きさの地面反力の作用を受け、前方へ移動できる。さらに常に重力と空気抵抗の作用を受けている。地面反力を定量的に

分析することにより走運動中の身体重心の上下の動きやキック力による速度の変化や機械的パワーなどを知ることができる。本稿ではいろいろな速度で走った場合の地面反力や身体重心の速度の変化、重



▶ 図 1 疾走中に身体に作用する力(渡川、一九六

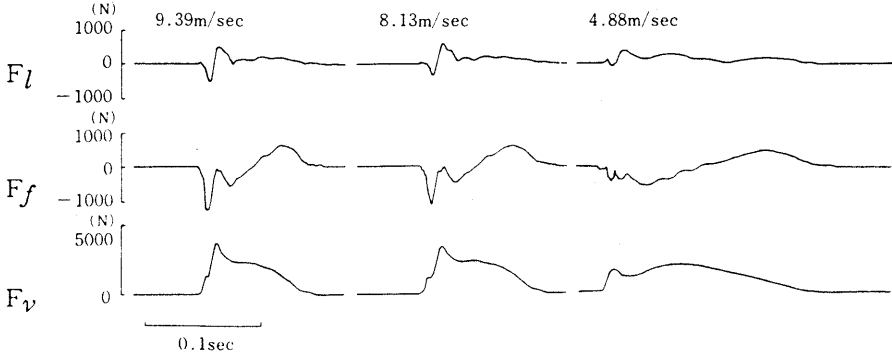
九)。Ffは地面反力の前進方向の分力、Fvは垂直分力、Dは空気抵抗、Wは重力である。

心の上下動についてのべることにする。

地面反力の測定にはフォースプレートあるいは圧力板などとよばれている力の計測装置が用いられる。圧力板は地面反力を前後、左右及び垂直方向の三つの分力にわけて測定することができるように設計されている。

図2には短距離選手Yanが4・88m/s、8・13m/s、9・39m/sの速度で走ったときの時間経過にともなう横方向(F1)、前後方向(Ff)および垂直方向(Fv)の地面反力の変化を示した。Ffは着地時から負の値を示し、後に正の値を示した。また、Fvは着地期間中はbody重より大きな値を示した。F1では着地期の前半に大きな動揺が認められる。このような記録からキック力は接地期の前半において身体の前進方向の速度にブレーキをかけると同時に身体の落下を受けとめ、その後半では身体を前方に加速しながら身体を上方に押し上げるように作用していることがわかる。

Subj. YAN



▲図2 いろいろな走速度における横方向 (F_l)、前後方向 (F_f) および垂直方向 (F_v) の地面反力 (松尾たち、1981)。

地面反力の大きさについてみると前後および垂直方向の分力は走速度が速いほど大きくなる傾向がある。比較的遅い速度では Cavanagh たち (一九八〇) はブレーキ時にはおよそ 29 kg、加速時には 21 kg、垂直方向の分力はおよそ体重の 2.1 倍であることを報告している。さらに早い速度では Payne (一九七八) がブレーキ時およびキック時ともほぼ体重の 0.4 倍、垂直方向では体重の 5.5 倍に相当することを報告している。すなわち、走運動中のキック力はこの速度でも前進方向ではなくおもに上方方向に向けられていることになる。

地面反力を時間で積分することにより身体重心の前進方向の速度変化や上下動を定量的に評価できる。前進方向の速度変化について Munro たち (一九八六) は接地時のブレーキによる減速はジョギング程度の速度 (3.0 m/s) では 0.15 m/s、マラソンレース程度の走速度 (5.5 m/s) では 0.24 m/s になることを報告している。さらに速度が速くなると着地による減速

は小さくなることが報告されている。着地期の後半では接地時のブレーキと空気抵抗によって減少した速度をもとにもどせる強さでキックすることで走速度が維持できる。したがって、減速分を補うだけのキックができなくなると走る速度は落ちてしまう。

身体重心の上下移動についてみるとItoたち（一九八五）はジョギング程度の速度（3.9 m/s）では11 cm、6.4 m/sでは7 cmと速度が速いほど小さくなることを報告している。なんと重心の上下移動は速度が速いほど小さくなっているのである。その原因の一つには走速度が速いほどピッチもはやくなり、一歩内での時間が短くなることが考えられる。

地面反力を定量的に分析することによりほぼ一定の速度で走っているようにみえても身体重心は前進方向の速度が常に変化していることや重心の上下動は走速度が速いほど小さくなることが明らかになった。また、前進方向の力と垂直方向の力の大きさから、走運動中のキック力の作用方向はおもに身体を

前方ではなく上に向けられていることがわかる。より速い走速度を得るためにはよりつよい前進方向のキック力が必要である。

Cavagnaたち（一九七二）は速い速度において着地のブレーキ期間に伸張性収縮をおこなっている筋に蓄積された弾性エネルギーが前進方向のキック力に利用されていることを報告している。短距離疾走では、全力疾走時のブレーキがあるおかげで、強いキック力が得られることになると考えることができると。

重心の上下動が大きいことは垂直方向の分力が大きいことを意味している。また、接地時のブレーキも少ないほうが後半のキック力が少なくできる。同じ様な速度で走っているときなどはこのような重心の上下の移動や着地のブレーキが少ないほうがキック力も少なく、経済的に走ることができると考えられる。そのために、長距離ランナーはできるだけ重心の上下動を減らしブレーキの少ない走り方をしようとするのである。

昨年、八月の'91東京世界陸上において男子100 m決

勝でカール・ルイスが9・86秒という世界新記録をだして優勝した。このときの最高速度はほぼ12 m/sに達していることが日本陸連バイオメカニクス特別研究班から発表されている。また、マラソンでは谷口浩美選手が2時間14分57秒で優勝した。その平均速度はなんと5.2 m/sであり、ルイスの半分にも満たない速度であった。同じ走る競技ではあるが、短距離と長距離では競うスピードもことなるし、走るメカニズムもことなることを理解していただけたであろうか。

(東京大学教養学部)

参考文献

- Cavagna, G.A., Komarek, L. and Mazzoleni, S. (1971): The mechanics of sprint. *J. Physiol.* 217, 709-721.
- Cavanagh, P.R. and M.A. LaFortune (1980): Ground reaction forces in distance running.

J. Biomechanics 13: 397-406.

- Ito, A., P.V. Komi, B. Sjodin, C. Bosco, and J. Karlsson (1983): Mechanical efficiency of positive work in running at different speeds. *Med. Sci. Sports Exerc.* 15 (4): 299-308.
- 小林寛道 (一九九〇): 『走る科学』大修館書店。
- 松尾彰文、福永哲夫 (一九八一): 『走運動の外的エネルギー出力からみた短長距離選手の特性』東京大学教養学部体育学紀要' 15: 47-57
- Munro, C.F. and D.I. Miller, (1987): Ground reaction forces in running: a reexamination. *J. Biomechanics.* 20(2): 147-155.
- Payne, A.H. (1978): A comparison of the ground forces in race walking with those in normal walking and running. *Biomechanics* VI-A: E. Asumussen and K. Jørgensen (ed.), Baltimore: University Park Press, 293-302.
- 渋川侃二 (一九六九): 『運動力学』大修館書店。

時をのせて都電がはしる

大多 和家



先日よく晴れた午後、ぶらぶら歩いて近くの飛鳥山公園にいった。日の光をいっぱいにあびて、子供がおおせい遊んでいる。そのかたすみ古い都電が、おいてあった。なにげなく説明の板を見ると、郊外電車から始まり都電になった歴史の説明とともに、都電に乗って遊ぶときの注意がまとめてあった。

酒気をおびて乗ってはいけない、危険物を持ち込まない、人に迷惑をかける、六歳以下の幼児は親がついていること、などが教育委員会の名で示されていた。これをぼんやり読みながら、しだいに真顔

になっていく自分にきつき、「まだ都電に乗れないな」と思った。

私ごとになるが亡父は、都電が全盛の昭和三十年代には、王子から日本橋までの19番線の運転士をしていた。その後、都電はしだいにバス、自動車、地下鉄にとって替わっていったが、父は最後まで残って荒川線で運転を続け昭和五十年に六十歳の定年退職を迎えた。小学校のとき親類の子が田舎から上京すると、一緒に運転席にいらしてもらい、二度も三度も王子と日本橋を往復したこと。妹と一緒に小学生

当時大流行した「だっちゃん人形」を買いに日本橋のデパートに朝早く並びに行ったときに、デパートの前で特別に停車してくれたこと。夏になると土用の丑の日に毎年きまって、母の好物であった鰻を日本橋の「登亭」で買ってきてくれたことなどを、とりとめもなく思いだしていた。

19番線が廃止になるとき、すでに大学生になっていたと思うが、連日のように大勢の父の仲間が家に集まっていた。ときには酒を呑みながら、夜おそくまでわいわいと、なにやら議論していた。労働組合の支部役員をしていたのと、19番線の駒込営業所から家が近かったため、たまりばにしていたためと思われる。今になってようやく、何を話していたのか想像できるようになった。仲間達はそれぞれ、都バス、都営地下鉄、区役所、図書館、都清掃局などにちりぢりに別れていった。最後まで運転を続けた父の唯一の自慢は、無事故で定年を迎えたことで、自動車は免許も取らず決して運転しなかった。息子夫

婦の運転する車には必ず助手席に乗ったが、乗っている最中に、注意らしいことを言ったことはなかった。さぞかし恐ろしかったことと今になって思う。ただ一つ運転で注意したのは、スムーズに加速して発車し、停車もスムーズにしかも目的位置にピタリと止めることであった。確かに父の運転する都電はなめらかで、乗っていて衝撃を感じることはなかった。

その父が大腸癌で昭和六十一年に入院した。本人には明らかには言わなかったが、うすうす感じていたと思う。見舞いに行くときよく、「お前は人の気持ち分からない」、と声の出る最後までよく言われた。その時は、「病気で苦しく大変なんだろう」と思っていた。最近になって、「人の気持ちが分からない」、意味がすこしずつ分かってきたような気がする。しかし今でも、正直なところ、『人の気持ち』は分からない。何が正しい天の道であり、何が『人の気持ち』に基づいた人の道だか分からない

い。そして悩んでここ数年間があつというまに過ぎ
てしまった。

今日は、酒をのんで酔っていることもないし、危
険なものも持っていない。またいちおうは成人して
いるので、人間に迷惑さえかけなければ、保護者が
いなくても都電に乗れる。そこで、飛鳥山公園を出
て、東京で一本だけになってしまった都電荒川線に
むけて、ぶらぶらと歩き始めた。日はまだ高くさん

私と子どもたち

杉野 恵

さんと照っている。王子駅について、ここちよい緊
張とおごそかな気持ちで乗車した。乗りながら、今
年の父の七回忌のときは子供達であつまり、散歩で
もしながら、都電に乗ろうと思った。考えているう
ちに二駅が過ぎて、家の近くの駅でおりた。私に
とって、都電は時間をのせて毎日ほしり続けてい
る。次は自分の子供を連れて一緒に都電に乗ろう。

(電気メーカー勤務)



小学校では、子どもはいつも走っているようです。チャイムが鳴って「終わりましたよ。」と言った瞬間に前をおさえてトイレに走りこむ子。（これは、低学年だけかもしれない）体育館に早く行きたくて、着替えながら走っていく子。休み時間が終わって息をきらしながら走って教室に戻ってくる子。もちろん『体育』という教科がありますので、短距離走・長距離走などでも走らなくてははいけませんし、運動会には『かけっこ』もあります。

子どもたちは、走っていい場面と、走ってはいけない場面があることを知っています。学校では時間も場所も、大部分は子どもたちが走ってはいけないことになっているようです。でも走ってしまう子どもたち。特に廊下は、毎日陸上大会のようです。学校では、生活目標によく『廊下は、静かに歩きましょう』というようなものがあります。常日頃から、私たち教員は、子どもたちに注意しているのです。なにも廊下を走らなくても、校庭だって屋上

だってあるでしょうに、と思うのですが、子どもたちは、様々な理由で走っているようです。とにかく、いくら口をすっぱくして「走るな。」と言っても、委員会の子が、ポスターを作って貼っても、廊下や教室を走る子どもは、あとをたたく、頭を悩ませる毎日でした。

昨年四月に入学してきた我が一年二組の子どもたちも例外ではなく、教室ではおいかけっこ、廊下ではかけっこという状態でした。

「お友だちとぶつかったらどうなるかな?。」

「けがするー。」「ころぶー。」「いたいー。」

「だから、校舎の中は、走ったらいけないのよね。」「はい。」

わかったのかと思っていると、ほんの五分で元通り。やっぱりかけっこです。そんな子どもたちが二期の半ばから変わってきました。三学期の今は、廊下でも教室でも走ることはほとんどなくなりました。うっかり走っている子にはまわりの子どもが必

ず注意してくれます。それは、私が鬼のように怒るからではなく、罰を与えるからでもなく、私のおなかにいる赤ちゃんのおかげなのです。子どもたち

「先生のおなかには、赤ちゃんがいるの。この赤ちゃんは、まだとっても小さくて弱いからみんなが走ってきてぶつかったりすると死んでしまうかもしれないよ。」という話をしたのです。子どもたちは、とても興味深げに私のおなかを不思議そうに見ながら聞いていました。

次の休み時間から、変化がおこりました。子どもたちは、走らなくなりました。「だめだよー。先生にぶつかったら赤ちゃん死んじゃうんだよ。」などと、注意しあっています。次の日には、「もう生まれたの？」とまじめな顔で聞きにくる子がいたり、「うちのおばちゃんも、赤ちゃんが生まれてくるんだよ。」と、子どもたちは、それぞれの思いで、私と私の赤ちゃんに話しかけていました。廊下で会う他学年の子どもたちも、「おなかに赤ちゃんいるん

でしょ。」と聞く子が増え、なんとなく気を遣って歩いてくれています。

今まで、毎度言っても、怒鳴っても『走らない』という約束は守ることができなかったのに、まだ生まれこない、目に見えない、おなかの中の赤ちゃんという存在を子どもたちはこんなに意識して、約束なんてしなくても、走ることをやめたのです。子どもたちの気持ちが変わり、また不思議でした。

『誕生』ということ、子どもたちに与える影響は、とても大きいものでした。一年生の子どもたちの中に、どんな気持ち芽生えたのか、すべてはわかりませんが、何かを感じ、大切にしようと思ってくれたことは、行動に表れました。

走ることは、子どもにとっては無意識で動くことのようにです。走っているつもりはないことが多いのです。でも、何かのきっかけで自分の行動を見直すことは、いい経験になるでしょう。また、いくら言っても、心でわからなければ子どもを変え

はできないのだということを私は感じました。走るということから、私と子どもたちと私の赤ちゃんの

近況を書いてみました。

(江東区立明治小学校)

走る玩具

くクルマの魅力く

村松 明子

クルマのおもちゃは、いつの時代も男の子に支持される玩具のジャンルの一つです。クルマとひとくちに言っても、電車、自動車、バイクなどさまざまですし、年齢によって魅力を感じる特性も色々のようです。

〇〜二歳ほどの小さな男の子は、クルマの玩具

——車輪のついたオモチャ——を目の前になると、たいていその背を手の平で押して「ブーブー」といながら動かそうとします。「ころがし走行」というのですが、この年齢用の、いわゆるベビーあるいはプリスクールトイと区分される玩具のクルマは、色あいも車輪のしくみもシンプルです。ゼンマイや

電池式のクルマだと車輪にギアのかみがあるため、動力を使わずにころがして走らせようとするとかみがこわれて、かえって都合が悪いものが多いのです。「ころがし走行」をする男の子を見ると、小さな小さな子にとってもクルマは「走る」という動性を象徴しているのだなあと感心してしまいます。

三歳くらいから、実在のクルマの形態に興味を沸き、自動車や電車の種類や名前を片っぱしから覚える男の子が少なくありません。クルマの玩具にもそれが反映されて、実在のクルマのミニアチュールは定番として根強い人気です。キャラメル箱ほどの大きさで一台三六〇円、百数十種ラインナップのミニカー「トミカ」や、青いプラスチックレールを自在につなげて新幹線から山手線まで色々な車種のある「ブラレール」は、男の子をもつお母さんなら知らない人はいないと言ってよいくらいでしょう。クルマそのものだけでなく、それをとりまく信号、ガンリンスタンドや、駅・トンネル等の交通・鉄道施設

の小物をもそろえて、自分なりのワールドをこしらえることも大きな楽しみでしょう。実際の世界へと興味を広げ、そこでダイナミックに走るクルマに対するあこがれを、そっくりなデザインで小さな自分が十分に把握できるサイズのミニアチュールを所有し、世界を構築することで満たしているのでしょうか。近ごろでは、サイレンの鳴るミニカーや、集めたミニカーをたっぶり飾りつつ収納もできるコンボイ、リモコンでスピードや走る方向を調整できるレールセットが人気です。

小学生になると、そういった小さな世界とび出して、クルマ、それも自動車のスピード感とフォルムにひかれていくようです。プルバック（クルマをバックにころがし走行されることでねじを巻ける仕組み）で走る、「チョロQ」や、街のおもちゃ屋さんの溝のような専用コースで大会が開かれるほど流行した「ミニ四駆」は、いずれも、まさに「走る」というクルマならではの最大の特徴が魅力となつて

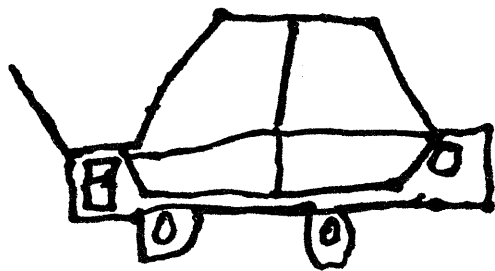
います。しかも、この年頃の男の子の好きな、デフォルメされたデザインと数多い車種も人気の原因でしょう。何台も買い集めては友達と見せあい、走らせて競走します。

さらに大きな男の子がクルマの玩具に熱中する場合、三方向に分かれるようです。一つは、幼い頃からのミニアチャールをさらに極めること。鉄道模型と呼ばれる、りっぱなホビーの一ジャンルで、部品の一つ一つも正確な縮小率でかなり精密なので、高価です。二つ目には、クルマのスピード感をさらに強調させた、AFXと呼ばれるレーシングもの。連結式のコースに埋められた針金に流された電流でミニカーほどのレーシングカーが、すごい速さで走ります。三つ目には、ラジコンです。最近ではF-1人気で、ラジコンでもF-1の車種がよく売れます。ラジコンは何といても自在に「走らせる」ことの楽しさが魅力でしょう。以上の三つとも、大人でも好きな人は本当に熱中して、専門誌等があるほどで

す。

クルマのおもちゃの魅力は、やはりそのサイズやフォルム・デザイン——実在のものに基づいた——と、「走る」というダイナミズムとの両点を備えているところだといえるでしょう。

(玩具メーカー勤務)



倉橋惣三の保育者理解(上)

児 玉 衣 子

序

一九五五（昭和三〇）年四月二一日、倉橋惣三は、日本の幼児教育界を牽引し続けた七二歳の生涯を閉じた。

職業生活の最初から幼児教育に関わったという点で、彼は我国初の研究者であった。そして、明治末の当時、教育に関わる最新の学である児童心理学にもとづいて新進気鋭の論を停滞気味の幼児教育界に提出し、以後、四十年余年にわたって講習や雑誌等を通じて全国の保育者を育て、また、保育学を構築し続けた生涯であった。

彼の保育者論の特徴を一言にいうなら、以下に明らかにするように、保育者の情操と知性および専門的職能を養い育てようとする姿勢に貫かれた、その意味で、保育者に対して際立って親身に親切的な論であるということができる。そして、それは、彼が活動の比較的初期に、挫折といひ得るほど激しい失望を保育界に対して経験し、その後、保育者を保育の「教育効力の最中心点」⁽¹⁾ と思ひ定めて立直り、以後、保育者とともに保育に邁進する姿勢を明確にしていることによると思われる。

彼は生涯に二度、保育者に向かつて敵しい叱責を語った。一度は一九五五年一月の彼の最後の言、すなわち、保育界に対する遺言となった言であり、もう一度は上述の保育界への失望と徒勞感もあらわな一九一六（大正五）年十二月に述べられたものである。しかも、これらはほぼ同じ内容、つまり一九一六年十二月のものが彼の亡くなる年に今度は年頭言とされているのである。以下、遺言となった一九五五年一月の『幼児の教育』巻頭言「新しき年を迎えるにあたって」を掲げておこう。

「根本考察が足りない。根本考察が足りないから、問題がいつでも枝葉のところまで動いている。かなりいろいろのことが考えられ、試みられ、部分的に究明されるにもかかわらず、意極の決定はいつまでも残されている。——我國の幼稚園教育界は、こんなふうにして一年一年過ぎていくのではあるまいか。時の経過はなにほどこずつの進歩を積み上げていくには相違ない。しかしその進歩は、あまりに気まぐれな、無秩序な、断片的な集積にすぎないものであって、そこに何

等の系統的組織的進歩というものを見ない。思えばあまりに非学問的なことである。

思いつきは、時には非常に賢明な真理の発見者である。しかしまた、非常に危険な誘惑者である。思いつきは偶然の力で我々をその一点にひきつける。それだけに、全局の関係を忘れさせ、前後の関係を失わせる。それはそれだ。しかし、それは全体の中のそれだ。拠のある基礎の上に位置すべきでなければならぬ。思いつきはこの明白な事実を没却させるほどに我々の心を部分的に興奮させる。——我國の幼稚園教育界に、またしてもこの思いつきの多いことである。

意味の分らない模倣や雷同や。おなじく意味のない反対や批難や。こんなことの繰り返しの中に我國の幼稚園教育界は、あまりに無意味に疲れている。風に吹きまわされて、ぐらぐらと東西南北をまわり疲れているのでなければ、ただ無意味に風に逆って疲れている結果は、つまり、どっちもくだらないことに倦き倦きしてしまわざるを得まい。意味のないところに厭倦がある。根のないところに枯死がある。

『分らない！』『分らない？』我國の幼稚園教育界は、あまりに

平気に、口癖のように『分らない』を繰り返している。一年たっても、三年たっても、五年たっても、おなじ『分らない』に立ち止まっている。中には、何がいかに分らないかを知らずに、ただ『分らない』でいる悲しい業天家もある。それでいつになって分って来るであろうか。つまりは『分らない』が、ますます平気になるばかりかも知れない。

分っているという。その多数は、『このごろ疑いがなくなつた』人である。或は、小さい枝葉の一局部に安住停止して、そこに、幼稚園教育問題の全部を懸け、また自分の全部を懸ける人であつたりする。これもひとつの悟りの開きかたかは知らぬ。しかし幼稚園教育を根本的に考えている人ではない。

私の幼児教育に関する考えは三十年前も現在も根本的には変っていない。基本的真理は時代の変化にかかわらず真理である。」

倉橋は以上の厳しい叱責を一九五五年の年頭言として保育者に語り、しかも、これをもって絶筆とした。それ

だけに、そこには単なる叱責というよりも、むしろ遺言と見得る、保育に対して生き続けていくであろう彼の思いの深さが漂う。

では、この厳しい叱責をもって彼が求めた根本考察をする保育者、あるべき保育者とは、どのような保育者なのだろうか。それを明らかにするためには、倉橋自身の保育者理解を探る必要があるだろう。なぜなら、彼が最後に求めた保育者像は、彼自身描いてきた保育者像と重なるだろうと考えられるからである。本論は、彼が保育者をどのように理解していたのか、その内容を、彼の書いたものから探るひとつの試みである。その際、保育者理解は子ども、子どもの「生活」、保育項目、保育方法等の理解と切り離すことが困難であること、また、保育項目との関連からの検討については既に述べたところから、ここでは倉橋の幼児の「生活」理解と合わせ見ることによって述べたい。

I 倉橋の初期の保育者理解

ここに初期というのは、次節に述べる一九一六年の最初の叱責の言までを指す。

倉橋の論が『婦人と子ども』に掲載され始めるのは九卷（明治四十二年）からであるが、本格的になるのは、前任者と田実の後をうけて同誌の編集者になった十一卷九号（明治四四年九月）からである。以降、亡くなるまで、彼の論は基本的に同誌において展開されている。

元々、彼は、幼稚園においても保育所においても保母が幼児の粗相を嫌な顔もせず、ごく自然に始末するのを見て、「保育室以外に、遊園以外に、幼児教育の貴さを感じて」⁽¹⁾いた。しかし、同時に、彼自身述べているように「正直にいへば……ただそこに居る子供等のことだけ考へて、保母諸君のことは余り考へて居なかつた」⁽²⁾というところが認められる。すなわち、この頃の論として「寒風」「春風」「機嫌のよしあし」等、保育者が自分の感情に促われて子どもの柔かい心を無思慮に傷つけないように、という内容のものが多⁽³⁾い。

また、この頃、倉橋は最初の体系的保育論「保育入

門」（大正三、四年、計十三回到わたって掲載）および「保母論」等をも著している。⁽⁴⁾ それらにおいても保母の喜び、苦心等がさまざまに語られている。しかし、基本的に、いかに子どもの心情や「生活」を損なわずに育てるかということについて、全篇保育者に語りかけているのであって、保育における保育者の位置づけについては全く述べていない。

それらの論の基調をなすと思われるのは「子どものしもべ」（明治四五年二月）である。彼はこの論を「先生だと思ふから間違ふのです。私達は子供に仕へるのです。私達の苦心はどうしたら一番よく子供の僕になれるかといふにあります」⁽⁵⁾と述べ始めている。

この「師は僕でもある」という理解は、日本に伝統的なものでなく極めて聖書的である。すなわち、ヨハネ福音書によると、イエスは捕らえられて死ぬことになる直前、弟子達との最後の晩餐の席上、弟子達一人ひとりの足を洗った。⁽⁶⁾ 師／弟子、主人／僕、（神／人間）の関係を逆転させたこの行為によって、イエスは、従来考えら

れていたこの関係の一方性を破り、この関係の中に人格的な相互性を回復させることを示した。倉橋の保育者理解は、この聖書的な「師」理解から出発している。

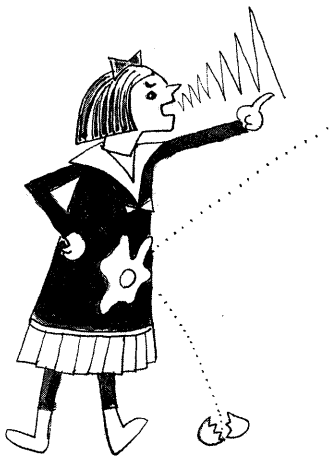
それは、既に一高時代から彼の所謂「子ども遍歴」を重ね、大学時代には「基督教的に見て、小児の心性は如何なるものであるか」⁽⁸⁾について優れた考察を公にしていた彼にとって、子どもの心性を損なわずに育てるべき役割を担う保育者に対して、子どもの代弁者として当然生じる要求であったといえるだろう。

II 挫折から立直りへ

ここに「挫折」と「立直り」と表現したのは、一九一六年十二月に掲載された保育界に対する深い失望の言、「斯くてまた暮れゆく」と翌年二月の保育者への希望をうたいあげた「保母その人」を指す。このことについては既に前掲の拙論で述べたので、簡単にふれるにとどめたい。

倉橋が保育界に発言し始めた明治末期、全国の幼児の

就園率は二%であった⁽¹⁾。保育所はあったが、まだまだ慈善的な性格が強く、従って数えるほどしかなかった。幼稚園に対する誹謗は、お茶の水幼稚園発足（明治九年）当初から、しかも、教育関係者からさえ無思慮に出され続けた⁽³⁾。これは、大阪市のように明治末に小学校就学児童の四割が卒園児というほど幼稚園の普及していた都市でも同様であって、大阪市学務課による三年がかり、数万人の児童調査で、卒園児童の全体に占める成績の優位が出された時、それまで保母達がどれほど気持を萎縮させながら保育を行ってきたか、この結果がどれほど



嬉しかったかが伝えられている。⁽⁴⁾

一九一六（大正五）年春、またもや有名人達の無責任な幼稚園誹謗論が出された。動揺する保育者達に対して、倉橋は、保育は保育者の自覚によって支えられていることを語って叱咤激励している。⁽⁵⁾しかし、その年の十二月、巻頭言「斯くてまた暮れゆく」において、倉橋は保育界を厳しく叱責し、深い失望と疲れきった心情を吐露している。初めに掲げた文と比べると以下の部分が内容的に異なるだけである。すなわち、最後の段階（「私の幼児教育に関する考えは」以降）がなく、その替わりに彼の疲れ切った心情が二段落にわたって語られているところが異なるだけである。⁽⁶⁾原文については、『倉橋惣三選集』第二巻「幼稚園雑草」に収められた同論を見ていただけると幸いである。

しかし、その二か月後、彼は立直る。失望の極にまで至った彼が、なお希望を託して立直ったのは、保育者へのみ保育の「究極の解決」⁽⁷⁾があることを改めて確信したからである。このことを彼は「保姆その人」に次のよう

にうたい上げている。すなわち、教育は総合作用であるとはいいながら「之れあるが故に、他の諸作用が初めて教育的に生きて来るものは——之れ無ければ、他の諸作用のすべてが、教育的に死するものは——更めていふ迄もなく、保姆その人である。保姆その人、実は実に保姆その人に、幼稚園教育の究極の解決がある」⁽⁸⁾。

そして、幼児に自由を与えるといい、幼児の個性を尊重するというが、それらのことは、自ら人格の自由を有し、自らの個性を尊重する者でなければ、真に幼児に自由を与えたり、その個性を尊重して教育し得るものではないこと、一人ひとりの保育者はこれらさまざまな点に關して、責任の一切を自らに帰して保育を行わなければならないことを語るのである。⁽⁹⁾

以後、倉橋はそれらのことを身を以て実践していく。彼の責任下にあつて、幼児や保育者から保育実習生に至るまで実に伸びやかに生き生きしていた様子については、後に山下徳治が敬意をこめて報告している。⁽¹⁰⁾また、彼の論は、彼自らの保育に関する根本考察の道筋を示し

ていくことになる。その代表的なものは、既に「幼児教育の新目標」（明治四十五年）に始まり「斯く育てたしと思ふこと」（大正八年）において飛躍的に深みを増し、結局、二十五年にわたって続けられた保育目標に關する一連の考察であり、また、一九三三（昭和八）年の「保育方法の真諦」¹²からさらに「系統的保育案」へと結実していく方法論的考察の数々であろう。あるいはまた、子どもの心理の理解に關しても、彼独自の現象学的把握は子どもの普遍的な心の動きを捉えており、いつの時代にも示唆を与えていくと思われる。

それら全体を通して倉橋が保育者に求めたのは、有名な「生活を生活で生活へ」¹⁴というモットーに示されるように、幼児の「生活」を損なわずに育てることであつたといえる。では、倉橋は幼児の「生活」をどのように捉えていたのか。また、幼児の「生活」が保育者の「生活」に導かれることによつて幼児の「生活」になるとは、一体どのようなことを指していたのだろうか。

——次回へつづく——

（フィリップス大学日本校・非常勤講師）

〈註〉

序

- (1) 『保姆その人』『婦人と子ども』十七卷二号（一九一七・二）、日本幼稚園協会、47頁。
 なお、以降、『婦人と子ども』『幼児教育』『幼児の教育』の記事については雑誌名を省略、巻号の記載も十七―二とさせていただく。

- (2) 第四十四回日本保育学会（一九九二）発表の拙論「倉橋惣三の保育論―保育者理解―」および同論に加筆した「倉橋惣三の保育者論」『保育研究』十二卷三号、建帛社、一九九一・十、46―53頁を見ていただくと幸いである。

I

- (1) & (2) 「幼児預所に就て」十一―九（明四十四・九）、34頁。
 (3) 「寒風」十一―十二、「春風」十二―四、「機嫌のよしあし」十一―十
 (4) 「保育入門」十四―一、二、三、五、六、七、八、九、

十、十五—一、二、七、十二。

「保姆論」十三—五、十。

(5) 「子どものしもべ」十二—二、57頁。

(6) ヨハネ福音書十三章一—十一節

(7) 「角帽生の子ども遍歴」『子供讃歌』フレーベル館、昭五十五

一 21—33頁。

(8) 「聖書と小児」『聖書之研究』九卷十三号（明三十九）、39

頁。

なお、この記事の後に、内村鑑三は「倉橋君は角管聖書研究会中最古参者の一人なり。今、君の手に由り斯くも有益にして深遠なる研究を見るに至りしを感謝す」と付記した。また、倉橋のこの論は、神学的児童解積論として、おそらくわが国最初のものであろう。

II

(1) 文部省『幼稚園教育九十年史』ひかりのくに昭和出版、昭四十四、580—581頁。

(2) 小河滋次郎「児童保護ノ法制關係ニ就テ」『児童研究』十五卷十一、十二号、十六卷一、二、三号（明四十五。六一—十

二月）。彼はこの中で児童保護を「公共ノ保護」、すなわち社会福祉にする必要を述べている。

(3) 飯島半十郎「幼稚園初歩」一卷『明治保育文献集』四卷、

日本らいぶらり、昭五十二、98頁（初版、青海堂、明十

八）。

(4) 大阪市学務課「保育の有無による児童成績比較表」および

無署名「戴冠の保姆」『京阪神聯合保育会雑誌』二十七号（明

四十四、七）、57—58頁および付表。なお、この調査はこの

種のもので最大であり、この時まで各地で見られたこの種の

調査は、これ以降、殆ど見られなくなる。調査対象は尋常小

学一年から高等小学二年まで計八学年、十三教科および総合

成績につき行われた。

(5) 「幼稚園可否の議論」十六—三、125頁。

(6) 一九一六年の論と一九五五年のそれとの違いは以下の四点

である。

イ、本文中に述べた最後の段落の内容。

ロ、旧かなづかいが新かなづかいに。

ハ、漢字が平かなに（例「居る」が「いる」に）。

ニ、文語的表現が口語的表現に（例「悲しめる楽道家」が「悲しい楽道家」に）。

(7) & (8) 「保姆その人」 十七―二、45頁。

(9) 同、46―47頁。

(10) 山下徳治「保育案問題を中心に―倉橋主事の教を乞ふ―」

『教育』四卷三号（昭十一、三）、岩波書店、433―434頁。

なお、お茶の水幼稚園の保母達が倉橋を敬愛しつつ、しかも徒に奉るのでなく実に伸びやかに彼を看にさえしていた様子は、例えば三十二―三「あたたか」と題された写真の解説、三十三―四「たより」等に伺われる。

(11) 倉橋の保育目標論については第四十二回日本保育学会論文集の拙論「倉橋惣三の保育目標論」および同論に加筆した「倉橋惣三の保育目標論」『幼児の教育』八十八―九十二（一九八九・十二）を参照していただけると幸いである。

(12) 正式の題名は「幼稚園保育の真諦、並に保育案、保育過程の実際」。この講義録が翌年『幼稚園保育法真諦』と題して出版された。

なお、この講義が巻きおこした熱気については同講義と共

に三十三―八、に掲載されている「講習会の於ける質疑応答速記」、及川ふみ「倉橋惣三選集第四巻の編集を終つて」、『倉橋惣三選集』第四巻付録リーフレット、等に伺うことができ

る。

(13) 「系統的保育案の実際」『大正昭和保育文献集』六巻、日本

らいぶらり、昭五十一（初版、昭和十年、日本幼稚園協会）

(14) 倉橋はこれを昭和八年の講習会で既にかなり以前から言っているという風にふれている（三十三―八、9、10頁）。また、大正14年の東京女子高等師範学校卒業生は講義で覚えていることとして言及している（柴田みどり「倉橋先生から学んだこと」八十九―六、14頁）。しかし、正確にいつ頃から述べているのかについては詳らかでない。「保育入門」（大三）から卒業生（大十四）の記憶までの十一年の間には、倉橋の附属幼稚園主事就任（大六、十一）、二年間にわたる欧米留学（八、十二、十一、三）等が挟まれる。

保育への視座(3)

—若い保育者の方々へ—

河邊 杲



ある幼稚園の保育研究に参加して学んだことであるが、三年保育四歳児クラスのK君はみんなと同じようにスムーズに行動ができないため、いつも日常の行動が他の子どもたちに遅れてしまう。降園児の支度も遅れがちで大体他の子どもたちが終わって席についてから十分から十五分遅れて座席に着くことは毎日のようであった。その日もK君を除いて全員揃った時には廊下のロッカーから持ちものを持って保育室の中央近くに座りこみ、

あそび着を脱いで通園服に着替えていた。担任の先生は座席（先生の近くに椅子を持って来て円型の席）に着いていることもたちに話しかけながら「手あそび」をはじめられた。十五分程遊んだ頃にK君が支度を終えて椅子をもって席に着くなり大声で「先生、ちがうちがう」と言ったので、活動を中断した先生は「なにがちがうの」と聞きかえされた。K君は「ほら、きのういったでしょう」と。先生が「あ、絵本をよんであげること

ね」と応えると「うん」とK君は大きくうなずいた。その時先生は「みんなが揃うまで。K君を待っていたのよ。ね、みんなそうよね。」と他の子どもたちに同意を求めるようなことばをつけ加えながら言われた。「うんそう。K君が来るまで待っていたのよ。」と揃わないことばがはねかえって来た。K君はきよんとした表情で友だちの方を見廻しながら聞いて立っていた。子どもたちはそのあと絵本をよんでもらい帰りの際の話し合いを終えて降園していった。

保育が終わり、この時心に残った担任のことばがけについて話し合っているいろいろなことについて考えさせられた。

先生はK君に約束と違った行動をしていたことについて、ごく日常的に軽い気持ちで説明するために「みんな揃うまで。K君の来るのを待っていたのよ。」と話し、さらにクラスみんながK君を待っていたのだという他人への意識を明確にす

るために、これも極めて日常的に「ね、みんなもそうよね」とつけたして言われたに過ぎないと行ってしまえば、それまでのことで何の不思議も疑問もわかないと思う。先生にとって当然の説明をされたのに過ぎないかも知れないが、約束を思い出し違いを発見したことに対しては応答しなくてもよかったのだろうかという疑問が生じたのである。「ちがうちがう」といったK君の指摘に対して説明をしたことについて先生の心には何も残らなかったのだろうかと思った。こういうことは、常にどこかでやってしまっていることのようにある。自分ではなかなか気がつかないのだが、使ったことばを文字に置きかえて記録にしてみるとそのことにはっと気がつくことがある。正しい説明とはいいながら、保育者は自己弁護のみをしたことになってしまっている。もう少し幼児のことばを傾聴するようになれば「Kちゃんよくおぼえていてくれたね」とK君の発見に対してひとこ

と肯定的に受けとめてあげられたのではなからうか。K君は別に批判したのでも、間違いを指摘したのでもない。約束との違いを発見したに過ぎないのである。

いま、ひとつ気づいたのは、「みんな揃うまで……待っていた」という先生のことばと、

「うん、そう。K君が来るまで待っていたのよ。」といった子どもたちの待っていたのことばには違うニュアンスが感じられた。先生のことばには「みんなが揃うまで……」が最初にあるようになにか「揃うこと」、「揃えること」の意識が常に念頭に強いのではなからうかと思った。三十人四十人の子どもをあずかっている集団生活の指導では当然のことのようにも思われる。全体が揃って同じように経験してほしいねがある。個性や個人差のことは一方で意識していてもである。これに対して子どもたちは「K君が来るまで……」という、「K君が来ないと淋しい。たのしく

ない」という心持が「待っていたの」の中にあるのではないだろうか。保育者にとっては少し厳しい過ぎることになるかも知れないが、先生の待っていたのはみんなが揃ってくれるのを待っていたのではないでしょうか。このことがよくないと問題にしようとしているのではない。こうしたことばがかけに気づくかどうかである。

これは井上忠司氏が『世間体の構造』（NHK選書）の中で述べている日本人の特性、つまり「日本人は基本的に一人であることの独立した自己であること、感覚が欠如している」ということと無関係でないようにも思う。「日本人の自我は眼前の状況に深くまきこまれて」と。つまり常に「みんなと揃う」「みんなに揃える」「みんなでまとまる」「みんなをまとめる」が自己意識を支配し過ぎていられるのかも知れないとも考えられる。（時代的な思想の背景も考えられるか）

もし、このような自己意識であることを自覚し

ないと、子どもたちの個人的な純粋な心持ちを理解することはむづかしいことになる。

常に、「集団が揃う」「集団がまとまる」ことを前提に保育するとしたら、子どもひとりひとりが見えてこないし、もちろんひとりひとりの心持ちにふれることはとてもむづかしいことと言わなければならぬ。

子どもたちは親や親しくなった友だちの顔が見えないと悲しくなったり、不安になったりする。ある子どもは入院していて友だちはほくのことを忘れてしまわないだろうかと心配しているのを聞いたこともある。待ちかね、待ちわびる心持ちが働くようである。したがって「待っていた」にはナイーブな心が伴っていると考えてよいであろう。

「揃えさせればよい」とだけ考えられている保育者の方はいないと思うが、前途の日本人的特性といったものが無意識に働くとすると、ひょ

っとして、結果的には揃ってくれることへのねがいのみが強く意識され、その時は子どもが見えなくなり子どもたちの心持ちにかかわれなくて子どもたちの心を育てないで終わるかも知れない。これは恐ろしいことである。

これに関連して思うことがある。それは「みんなが揃うように」「みんながまとまるように」ということは集団を制御したり操作したりすることにもつながる。こうなると、ますます子どもの心持ちにはふれられなくなってしまうだろうか。これも幼稚園などでよくある日常的なことであるが、子どもが怪我をして応急の処置をするために怪我した子どもを職員室や保健室に連れていかれるとさうしろからぞろぞろと他の子どもたちが付いて来る。その時多くの場合先生は「邪魔になるとこまるから）……お部屋で静かに待っててね」と言って、あとをついてこないように指導される。これは臨機の指導として当然のことだと思いが

「心配して来てくれたの？ 大丈夫だから、安心してね」をお部屋で待つことの指示の前にひとこと話されたらどうだろうか。

このように考えて来ると出生以来人間がもっている心が一層豊かに育っていくかどうかは、極めて日常的な集団生活のその時その場において、子どもたちのナイーブな心が秘められているといってもよい原初的な言動の、その心のところにもふれてあげられるかどうかにかかっている。そうなれば前記日本人の特性の基本もきつと変容を見るのではなからうか。今般の教育要領の改訂で真剣に見直しをされている中で、このような視点で見直しをしてみることはどうであらうか。

「ひとりひとり」が強調されると必ずと言ってよい程集団の指導はどうするのかという問題が出て来る。個人で活動することのたのしさととは違つた、集団でする活動のたのしさを味わわせたり、三十人四十人のクラスや学年や園全体などではい

ろいろな形の集団でする活動もいろいろ考えられる。ひとつの集団でする形に慣れる指導も必要ではあるが、なんといっても形になる前の人間が生まれつきもっている不思議な社会的感覚とでも言える「調和させようとする働き」や「共鳴したり共振する働き」を信頼し、この働きが十分機能するように育てていくことこそ大事なのではないだろうか。つまりひとりひとりの響きあう感受性といったものへの働きかけを抜きにして集団生活の指導はないと思う。もう一度、ことばではひとりひとりを大切に子どもを理解することから保育がはじまると言っている保育者自身の自己意識（ほんとうにひとりひとりが感じとれ、そしてしっかりと見える自分になっているのか）についてたしかめてみたいものである。

(二)元・洗足学園短期大学

幼児の笑いとその保育における意味（3）

三 歳 児 の 笑 い

友 定 啓 子

一・自己像の軸をつくる

二歳児になって「他者の目に映る自分」に気づき始めてきたことを前回のべた。今回三歳児の笑いを見つめてみると、彼らはただ他者の目に映る自分というだけでなく、「どのように映っているか」、もっと言えば「受け入れられているかどうか」ということに敏感になってきているように思う。三歳児は周りの大人の示す期待行動を理解し、それに自分を合わせようと努力し始める。大人の示す方向を一つの支えとして、自己を形成するようになる。保育をする側から見ると、まとまりを持ってきて、ものわかりがよくなったように感じられる。

① 先生にはめられる

△記録1▽ 先生が爪の検査をしている。子どもたちがテーブルの上に両手を出し、それを先生が一人ずつ点検し「よし、よし、よし」と言っていく。グループ全員が合格で、四人がいっせいに「やったあー」と歓声を上げる。

△記録2▽ H夫、トイレのスリッパを一人で全部並べてい

る。先生にほめられ、観察者もほめる。その後、トイレに入
り出てくるとき、再び全部きれいにならべる。満足そうにニ
コニコしながら部屋に入ってくる。

二歳児も他者の目に気づいてはいるが、どのように映
っているかについてはほとんど無頓着だった。しかし三
歳児になって、保育者の評価を気にしはじめる。△記録
1▽は爪の検査を受けるので、緊張を伴って我が身を差
し出している。明らかにきれいな子も不安げに保育者の
顔を見上げているところを見ると、保育者によいと言っ
てもらうまでは安心できないようである。保育者の一言
で自己否定の危機から解放され、思わず歓声があがる。

H夫はトイレのスリッパを並べ、保育者や観察者には
められた。よい自分が認められたのである。そしてその
後もよいと認められた行動を満足気にしている。おそら
く、自分はとてもよい子だ、誰に言われなくてもスリッ
パをきちんと並べることができるし、そのことは先生も
知っている、という自信であろう。大人のよい評価で自

分を支える軸ができたのである。

「こういうことをすれば大人に認められる」「こういう
ことは大人には認められない」ということの積み重ねが
ある意味では「社会化」の一般的な形式なのであろう。

「認められる行動」のストックをたくさん持っている子
は自信を持って対処していくことができる。しかし、中
にはあまりに大人の行動期待に添うことに心を砕きすぎ
て、自分の感情や意志を閉じ込めてしまい、苦しい思い
をする子どももいる。一方反対にそのストックがまるで
ない子どもも、自己のよりどころをもてず混乱し不安定
になっていく。保育者の柔軟で多彩な対応が求められる
ところである。

② 先生に注意されて笑う

△記録3▽ A子、口に食べ物を入れたまま立ち歩く。保育
者に注意されて、A子は首を後ろにそっくり返して笑顔でう
なづく。

△記録4▽ 保育者の説明中にA夫はおしゃべりをしてい

る。保育者「お話ししたい人は外で遊んでもいいよ、かささして。わかった？」A「A夫は「ハイッ」と下を向いて口は横に開き(笑顔)、すぐそばにいた男児を見てニッと笑う。

ほめられて笑うのは自然なことであるが、興味深いことに子どもたちは注意された時にもよく笑顔を見せる。

大部分は下を向いているので、自分に向けられた笑いのだろう。注意され、否定された自分を笑顔で精一杯保持しているかのである。もし、この笑顔がくずれると、自分自身を失ってしまいそうになるのだと思う。その時は泣く。注意される時、子どもたちは二つの情報を受けとっている。一つは注意の内容で、自分に何が求められているのかということ、そしてもう一つは、自分自身は否定されているのかどうかということである。自分に何が求められているのかが伝わらず、ただ否定されていることだけしか伝わっていない時は、その保育は不十分であり、時に自信を失わせるだけで有害でさえある。注意されて笑顔が出るというのは、自分をなんとか保持

しながらその注意をうけとめてもいるのだという表明である。

二、集団の中の自己価値―お当番、大人気

△記録5▽ F夫、当番表を見て「やったー！」と片手をあげて、室内をひと走り、ふた走り。M夫、A子も畳のうえをかけ回る。M夫は「やったあ、やったあ！」と室内にひびき渡る声を出す。

△記録6▽ 先生が「当番の人」というと、四人が待ち構えるようにパッと出てくるが、その途中D夫がいすにつまずく。それを見ていたA夫「あほ」D夫「……」A夫「ぼちがあたった」先生の「なんのぼち？」A夫「あたったぼち」

この子どもたちだけでなく、ほとんど全ての子どもが、当番の日を楽しみにしている。この当番の仕事内容は、あいさつと給食の配膳であるが、その仕事内容を必ずしも喜んでいるわけでない。当番と喜んだ割りにはやることを忘れてしまっていることがよくある。当番にな

ること自体に意味があるようで、ほかの人と自分はちがうんだという意識、自分は当番でない他の人たちよりは価値があるという満足感が、彼らにあるようだ。明らかに他者（クラス集団）の存在を前提にしている。その意味でこの笑いは社会的であると言える。二歳児でもこの当番を喜ぶということは観察されているが、少しニュアンスが違うようである。次の記録は二歳児の時のものである。

△記録7▽ 先生が当番の子どもを呼ぶ。「E子さん、ここへどうぞ」と言われE子は「イエイ、イエイ」と得意そうに答える。「F子さん」F子ニコッとしながら「ハイッ」と答える。G子、C夫も答える。E夫はニコとひかえめにほほえむ。G夫はしばらくたつてから、ニコッ。

二歳児もお当番を喜んでいるのだが、その喜びは自分のところだとどまっているようである。三歳児のようにはでなパフォーマンスは見られない。もちろん三歳児が

すべてこのようなことをするのはないけれど、当番であることを他のみんなの中で確認したい、知ってもらいたいという思いがあるようである。それは△記録6▽の、喜んでとび出た当番の子がつまりいた時に、それを見ていた当番でない子が発した「罰が当たった」という言葉にこめられた羨望の気持ちとしてもあらわれている。三歳児になると、集団の中で自分が特別の価値を付与されたことがわかりそのことを誇りに感じるのである。次の笑顔も、自分の価値に関連している。

△記録8▽ 製作中、先生に「J夫、クレパス貸して」と頼まれる。J夫ニコッとして「ハイッ」と返事をし、となり
のA夫に「ほらー」と笑顔を向ける。

三、「笑い」による保育

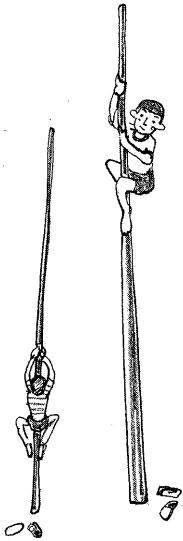
△記録9▽ 朝の集まりの時、シャツがズボンやスカートからはみ出ている子が数人いる。保育者「あの子おかしいて、アッハッハッハッて、笑われるよー。知らん人でも

ねー」それを聞いて、二、三人があわててシャツをおしこむ。その中で一人、A夫はパチンと自分の顔を打つように手でおおって泣く。

身じまいに関する「しつけ」は案外こんな形でされているのが普通ではないだろうか。シャツがはみ出るくらいは当人にとってはどうでもいいことで、ほとんど実害はない。それにもかかわらず、美的な問題として教えねばならないわけだが、理屈では説明がつけにくい。そこで集団の規範からはずれるとして、「笑い」を利用するのである。「笑われる」ことは集団からのずれ、しかもマイナスの価値を意味するので、内容の正否に関係なく非常に強力な力となって当事者に働く。大人社会でも「人様に笑われないように」という、集団の規範からの逸脱を内部規制する力として個々の人々を支配している。結果としてその集団の同一性を保持するのに大きな機能を果たしている。井上忠司は『世間体』の構造』の中で、「笑いには『社会的制裁』という大切な機能が

ある」ことに触れている。⁽¹⁾

三歳児は前述のように、他者に受け入れられるかどうかに敏感になり、相手に同一化したいという思いを抱いているし、また集団からのずれも理解できるようになっている。それでこのような「笑い」を利用して行動を変えさせることがある程度できることがわかる。しかしこの方法は幼児に屈辱感や疎外感を与えることになるし、記録のように子どもによっては混乱し、うちひしがれてしまうことも起こってくる。このような「笑い」を利用しなくても、保育者の思いを伝える方法を考えていきた



いと思う。

四・価値の内面化―罪意識のカモフラージュ

保育者にほめられたり、注意されたり、また集団の中の自分の位置などに気づいてきた三歳児は、それらの体験を内面化して自分の行動の指針としていくようだ。次の記録はそうした内面化された規範に関連した笑いである。

△記録10▽ B夫がF夫に、ニッと笑いながら、足げりをしかける。

△記録11▽ E子とG子が、別の女兒のナフキンをテーブルの下にかくして、二人でニヤニヤ笑っている。

△記録10▽のような笑い、すなわち何か悪いことをしている時に浮かぶ笑いは一歳児や二歳児の時にもごく少数ながら見られた。一歳児の場合は、自分の食べ物が多くなったので隣の子のものを食べて、保育者に注意され

た直後のことで、ニッと笑って同じ行動をしたというものである。また二歳児では、けんかになって思わず相手にかみついてしまい、観察者に止められて、自分で「○ちゃん、かんだー」とニコッと笑って言ったという記録がある。一、二歳児はごく少数であるが、三歳児になると△記録11▽のように複数の子供に共有されることも起こってくる。このように笑いが付随するのは、子ども自身の中にそのように行動したいという気持ちと、しかし同時に「やってはいけない」という意識があることを示していると思われる。「やってはいけない」と思わせるものはこれまでの経験で、保育者に禁じられたという体験であろう。内面化された行動基準ということになる。しかし、やりたいという気持ちを抑えることができず、相手や周りのこともある。一方で、笑いは相手との親和関係を樹立する機能を持っていることをすでに感得しているのだから、笑いなわち和解を前面に押し立てて、実際には行動してしまおうという非常に複雑な戦略をとっていることになる。この笑いは意識された悪意の力

モフラージュ作用を持っている。そしてこの笑いは、周りの人間にも作用しているけれども、実は本人自身の罪意識を軽減させその行為を正当化させる機能をも果たしているように思われる。△記録11▽のような複数の子どもたちにこの笑いが共有された例は三歳児になってからのものである。この場合は他者との合意を笑いによって成立させ、その行動が支持されより正当化されている。共犯の笑いである。

「笑い」は、基本的には快や喜びに対応する感情を表現するものである。また、対象との親和関係を形成する機能を持っている。しかし、同時によく知られているように、笑いはこのような悪意や悲しみ、憎しみ、あざけりなどのような否定的な感情に付随することができる。大まかに言えば、これらの笑いはその否定的な感情を軽減する機能を持っている。三歳児がこの笑いの機能を使っているということになる。意識して使っているとは思えないので、ほとんど身体にすりこまれた行動パターンのように思われる。

五. 「おかしさ」「おもしろさ」と笑い

△記録12▽ G子、園庭からもどってきて「おもしろーい、

K先生がまわったー(ころんだ)」と笑顔で報告する。

△記録13▽ 『にんじんばたけのピピブペポ』を読んでもら

う。「ババコ、ビビコ、ブブコ」などの子豚の名前を聞いて、あちこちから「ハハハッ」「フフッ」と笑い声が起る。

「おかしさ」「おもしろさ」がわかるためには、対象に何らかのズレを発見する力が必要である。「ころばない」と思っていた先生がころんだ。そのずれがおかしいのである。そのずれが大きければ大きいほど、おかしさは増していく。言葉の響きにも敏感である。ふだんの言葉にはない音のつながりがわかるのである。ふだんとは違うということ、そして新しく提示されたものに対して共感できるときに「おもしろい」という感じが生まれる。三歳児になって知的理解力の獲得を背景にこういうことが可能になってきたが、これを他者との関係に利用

し始めるのは四歳児以降である。

三歳児は相手の要望に合わせて行動することができ、それが喜びでもあり、自信にもつながる時である。よい自己像の内実を作っていこうとしている時期ともいえる。その時にどのような自己像を与えられるかが保育者にかかっている。その子自身に価値があること、その子が本来持っているよさをできるだけ伝え、また、大人としての様々な価値を一人一人の状況に合わせてわかるように伝えていくことが、その子の自己像を支えていくことになると思われる。

(山口大学)

引用文献

- 1 井上忠司著 『世間体』の構造』日本放送出版協会 昭和五二年

第45回日本保育学会大会

講演：大江健三郎・津守真・森田明・原ひろ

子・長畑正道

企画シンポジウム

○保育学のアイデンティティを求めて

阿部明子 他

○保育臨牀の視点から園生活を考える

大場幸夫 他

○新しい歴史学と保育研究の接点

太田素子 他

自主シンポジウム

個人あるいは連名の研究発表

ワークショップ

期 日：5月16日(土)～17日(日)

会場：東京・お茶の水女子大学

Sちゃんが動き出すまで

守永 英子

Sちゃんは、間もなく三歳になる女の子である。二歳児講座に参加しているので、母親と一緒に、週に一度、通ってくる。アコーディオンカーテンで少し仕切られた部屋の向こう側で、母親が講義を聞く間、こちら側の、遊具のあるところで、他の子どもたちと一緒に過ごす。

子どもたちは、絵本を見たり、室内用の小さな滑り台で滑ったり、ままごとをしたり、線路に電車を走らせたり、思い思いにしたいことをして遊び、保育に当たる大人や、他の子どもたちと、自然な触れ合いの機会を持つ。年齢の幼い子どもたちのことであるから、母親から離れにくいこともあり、母親に、そばにいてもらうことで、やっと自分の活動ができたり、講義を聞く母親のひざの上にいることで、安定感がもてたりすることもある。

S子は、ここでは、あまり積極的に遊べる方ではなく、口数も少ない。一方、Y子は活発で、自分が欲しくなると、他の子どもが手に持っているものでも、自分のものにしてしまう。そのY子がそばに來ると、S子は、表情をこわばらせて、手に持っているものを、Y子に渡してしまうというふうであった。

今回で、八回目であったが、年末や正月が間にはいり、何週間か間があいたせいもあったか、S子の表情は、今日もほぐれなかった。

机のところでは、何人かの子どもが、絵をかいたり、シールを紙にはって遊んでいた。

S子は机のところに行ったが、少し遅く来たこともあってか、まだ、何かを始めたふうでもなく、じっと腰かけているだけのようであった。

前に私と遊んだことがあったのを、S子は覚えているだろうか。確信がないままに、私は、そっとS子のそばに近づいて腰かけた。S子は無表情に、じっとしていたが、私が、机の上のシールを取りあげて、「シール、はる？」と声をかけると、かすかにうなずいた。S子の前に紙を広げ、シールを一つ、台紙からはがして手渡すと、S子は、受けとって紙にはった。次に渡したシールも、S子は、紙にはる。私がシールをS子に渡し、S子が紙にはる活動は、自然な流れになった。

二人の活動の流れに、もう少し、S子からの積極的な気持ちを引き出せないだろうか。私は、働きかけを、少し変えてみようと思った。シールを台紙からはがすときに、「今度

は、どれにしようかな？ 丸にしようかな？ それとも三角にしようかな？」と、つぶやいてみる。S子の、シールへの関心を、もう少し引き出せないかという試みである。「丸にしてみよう。はい、小さい丸いの」「今度は、大きい四角の」と渡すと、S子は、渡されるシールを次々はった。はっているうちに、偶然、目や口のようになったので、「これ、お顔みたいね」と、気持ちを引き立てるように言ってみるが、あまり反応はない。

今度は、もう一歩すすめて、シールをはがすときに、「どれにする？」と、S子に選ばせてみる。S子は、自分で形を選び、黙って指す。シールを渡すとき、S子が受けとるのを待たずに、ふざけて、S子の指にくっつけるようにして渡すと、一瞬、たじろいだようであったが、すぐに慣れて、おもしろがって、くっくくと笑った。やっとなし、ほぐれたようであった。

「今度は、別の色にしてみる？ どの色がいい？」S子は、何色かあるシールの中から、自分で選び、自分ではり始めた。赤い大小の丸が三つ、目・口のように並んだとき、S子は、私を、つついた。「見て欲しい」という仕ぐさを受けとめて、「ほんと、又、お顔みたいになったわね」と言うと、S子は、満足したのか、又、シールをはり続けた。S子のシールはりは、おやつになるまで続いた。

おやつは、「いただきます」を待てない子どもの多い中で、S子は、いつもあまり食べたがらない。今日も、食べるようすもなく、腰かけているだけ。「食べないの？」「どれが

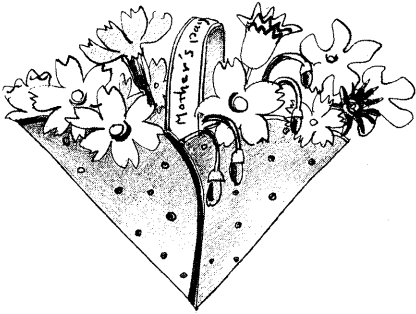
好き？」などと声をかけても、反応がない。働きかける方向を少し変えて、「ママと食べたいの？」と聞くと、うなずいて、講義を聞いている母親のところに行ってしまった。せっかく母親から離れられていたのに、母親のところへ行く切っ掛けを作ってしまったのは、失敗だったかな、と思ったが、S子は、間もなく、母親を伴って、おやつのところへ戻ってきた。母親は、別に何も積極的な働きかけをするわけではなく、そばにいただけであったが、S子は、おやつを食べ始めた。そして表情が少し明るくなり、立ち上がった、動き出した。時どき跳びはねるような動きが見られるのは、気持ちも弾んできたのだろう。次第に、部屋の中を、あちこち動きまわり、ぬいぐるみの動物を見つけてきた。「お母さんが見ていくるだけで、元気がでてくるのね」と、思わず母親に声をかけ、顔を合せて、にっこりするほどの、S子の変化である。

S子は、ゴムまりと、人形と、ぬいぐるみの動物を二つを抱えて動きまわり、時どき、まりを投げては、自分で拾う。動きが少しずつ大きくなり、人形などを抱えたまま、まりで遊ぶのは大変になったのか、S子は、私のところに、人形や動物を持って来て渡した。そして、まりだけを自分で持ち、一層、自由に動きまわった。S子に渡された人形たちを、私は、S子から預けられたと解釈し、カーディガンの中に、しっかりと抱きかかえ、S子は、そこを基地と定めて、安心したかのようにであったが、そのあと、人形を、受けとりにくるわけでもなかった。

母親が、講義を聞くために席に戻ってから、終わるまでの三十分ばかり、S子は、母親がそばに居なくても、明るい顔でかけまわり、滑り台をすべり、元気に遊んだ。

集団保育のように、一人で何人もの子どもをみなければならぬ場合、遊べない、乱暴をする、はさみを使っていて危ない、などと気にかかることがいくつもあって、心忙しく、つい子どもを外側から眺めてしまう。しかし、今回のように、じっくりと一人の子どもに付き合っ、遊び始めるまでの心の軌跡を共に歩んでみることは、普段はなかなか経験することのできない、興味深いことであった。

(元・お茶の水女子大学附属幼稚園)



*** ある日の育児日記から ***

****(17)

佐藤 和代 ***

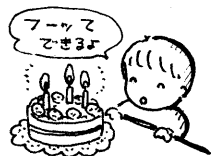


さて、いよいよ臨月です。いつ陣痛がきてもいいように、家の中を整理したり、赤ちゃん用品を用意したり、大きなおなかで動き回っています。圭は、妊娠初期から「けいちゃんのおなかにも赤ちゃんがいるの」と主張。このごろは「ほら、動いてるよ」とおなかをピクピクさせるこりようです。赤ちゃん用品にも興味しんしん。

それだけでなく、圭はごっこ遊びが大好き。このくらいの年齢の子はみんなこうなのでしょう。アンパンマンになったり、おひめさまになったりするのはいいのですが、お母さんになると大

変。包丁を使ったがる、熱い料理を運びたがる、しまいいには私用の大盛りごはん（妊婦ですから…）を自分の前において、「お母さんだからこつちを食べるの」と言ったりします。「残しちゃダメよ」と言うのと、「お母さんだから全部食べられる」と真剣な顔。「ごっこ」か本気か、時々わからなくなって困ります。本人も案外わからなくなっているのではないかしら。

大人がこんな遊びにつきあうのは、けっこう大変なもの。うっかり電話に出てしまつて、「けいがお母さん！ けいが出るの」と叱られたりします。あー早く下の子が育たないかな。ごっこ遊びは子ども同士でやってほしい！



圭はもうすぐ3歳。いちごのバースデイケーキをリクエスト!

の地域全体が、経済的にも社会生活の面でも深く根付き、色々な社会の変化にも動揺せぬ人生観と、強い精神力を持ち、子ども達も喜んで後を継ぎ平和な農村生活を営みながら、社会に役立つ人物が多く輩出されるようにならなければ、その開拓が成功したとは言えません。いかに経営拡大を図り経済的に豊かになっても、子ども達が目の越を嫌って農村生活を継続出来なかったり、後を継いでも自分の事のみしか出来ないのであれば、それは砂上の楼閣でしかなく、くずれてしまいます。」との指針に基づいて、十勝沖地震の際全国の子ども会より戴いた見舞い金を基金に、昭和四十三年に子ども会が発足した。

(二)目標と方針、活動内容

- 一、みんなとなかよくする子ども
- 二、きまりを守る子ども
- 三、進んで勉強しよい遊びを選べる子ども
- 四、自然に親しみ恵みに感謝できる子ども



▲ 子どもの会みんな 右上 O先生、左上 松島さん

五、助け合い協力できる子ども

この五つの目標と方針のもとに、精神的なお話、自然観察、読書活動、スポーツ、レクリエーション、奉仕活動がされた。「はまなす」(実践記録1)に、これらの活動内容の経緯が書いてある。

(1)精神的なお話について

「子ども会を通じて、子どもたちのお話や、争い、主張を見たり聞いたりして、それぞれ家庭事情もちがうが、何が正しいことで、どういうことはしてはいけないか、本当に美しいこととはどんなことか、どういう言動が人間としてみにくいいけないことか、そして、どのように人間として真実に生きるべきかと、精神面のお話も取り入れるべきだと痛感しました。それで、野辺地教会Y牧師が来て下さっています。」

(2)読書活動について

「Y先生より児童用雑誌をいただき、子どもに自由に読ませましたところ、夢中で見たり読んだりしている姿を見て、是非読書活動を取り入れたいと思い、公民館の

本、県立図書館の本をお借りしました。」

(3)自然観察について

「昭和四十五年に、むつ小川原巨大工業開発構想が出され、地価が高騰し、自然が破壊される可能性が出て来ました。目ノ越に生まれ、目ノ越を故郷とする子どもたちに、自分たちの生まれ育った踏みしめている大地が、いかに素晴らしい自然で自分たちを支えてくれているかを学ぶように、積極的に自然を知ることを始めました。自然をじっくり観察し、美しい中にもきびしく調和された摂理を学ぶことにより、人間はどう生きるべきかを、自ら体得してもらいたいと思います。」

野鳥、小動物、魚貝、植物、昆虫の五つの班を作り、生態観察、昆虫、植物の採集標本作り、当時小学校のO先生が指導して下さいました。」

(三)「はまなす」

この実践記録集に、子ども達の作文と絵がのっている。自然観察文は、子ども達が自然の不思議さに心を引

かれ、それを探究しようとする姿勢が表れている。年を重ねるにつれ、「自然を観察する真剣な態度、鋭い確かな目も育ち、自然から物事を順序だてて考えて行こうとする態度を学んだ。」と、指導されたO先生も書いておられる。私も読ませていただき、小学生がこんなに詳しく注意深く観察できるものかと、その内容の高度さに驚かされた。

昭和四十八年度に、自然観察版画カレンダーが活動の中で作られた。生き生きと力強く、力作、大作(30 cm × 54 cm)ぞろいだ。裏表紙に、次のような文章が書いてある。

「子どもたちはこのカレンダー製作を通して、主題を決め、内容を構成し、仕事を分担し、下絵を書き、版を彫り、流れ作業で刷り上げる。この一連の仕事の中に子どもたちが一つの目標に向かって生き生きと活動し、お互いに認め合い、励まし合い、遅れている者には力を貸し、……それぞれが一つの大きな歯車を回す小さな歯車となって、個と個が、個と集団の中でお互いを信じ固い

◀ 版画カレンダー「自然観察 野鳥」中二作



協調性が培われ、大きな自信が子どもたちに身についたと思う。」

四、四十数年の歩みを経て

「目ノ越に生まれ、目ノ越を故郷とする子供たちが、ふるさとを誇りとし、親たちの苦難をのりこえ、酪農の

跡を継いでくれるようになりました。後継者の会も組織され、酪農経営と自治会活動を支えてくれるようになりました。私たちの集落には嫁不足の問題は全くありません。」と、松島明美さん（松島夫人）は、全国農業コンクール発表原稿の中で語っておられる。

事実、多くの子ども達（子ども会で育った子ども達）が立派に後を継いでおられる。「開拓の成功と発展は、



▶「わらびとり」 絵・字 五年作

喜んで跡を継いでくれる後継者が育った時」という目標が、三十年、四十年後に達成されているのである。「親から一度も後を継げと言われた事はなかったが、小さい時から牛が好きだったので自分には酪農以外の仕事は考えられず……」と酪農高校で学び、北海道で働きながら乳牛改良を勉強され、目ノ越に帰って牛群改良を進めて来た人。また「手作りイカダレース」に、『遊びも一生懸命にやれなかつたらやめた方がいい』という先輩の一言に奮起し、一年中イカダの事を考え、納得のイカダを作り、力のある部落の選手もそろえ、夜遅くまで海で練習をした。そして優勝できた「信念を持って、何事も一生懸命やれば、結果はあとからついて来るものだ。」と書いている人。開拓者一世（御両親）の方々の生きざまが、二世の方達に引き継がれている。若い二世の方達が、研究を重ね、力を合わせて村づくり到现在も頑張っておられる。

五、おわりに

酪農地帯の牧草地は見渡す限り一面の緑のジュータンだ。すばらしい景色である。しかし、ここに至るまで、どれだけ血のにじむような苦勞がなされてきたのかを、そこに生きて来られた方々の証言で知った時、「自然」について深く考えさせられた。私自身、山や海が好きでよく出かける。少しばかりの花や野菜作りもした。しかし私にとっては見て楽しむ、遊ぶ、味わう自然である。目ノ越の開拓者の方との出会いにより、土地を拓き耕し、食糧を得、家畜を育てる自然、生の営みとしての自然、そして人間が生きていく上で不可欠の自然のあることを知った。また子ども会の自然観察の活動により、人間ばかりではなく、すべての生き物にとっても生ける場であることを知った。私の住んでいる六ヶ所村は、核燃施設の問題をかかえている。後継者の方が、「今、我々が農業を引き継ぎ、色々学んで世界にまけない酪農経営にしよう」と前進しているが、農業に大切な土、空気、水が徐々に放射能で汚染され、長い年月、あるいは一挙に農業に適さない地帯になるのではないかと「不安」と

◀ 「スキー大会」 絵・字 六年作



怒りを語っている。ほんとうに原子力燃料は必要なのか、時流に流されることなく、自然を守る、人間を守る立場で考えなければならぬと痛感した。

(はるにれの会)

五月号はへ走るVを特集しました。

子どもにとっては、歩くより走るの方がリズムがあつているようです。学校からの帰り道も、友だちの家に遊びに行く時も、歩いて行けばいいのに、いつも走っています。走る遊びもたくさんあります。かけっこ、缶ケリ、鬼ごっこ、サッカー、野球もそうです。大なわとびも遠くまで走ると、もどるのが大変な分だけ、遊びとしてはおもしろいのです。

大人になると、歩く生活が基本で、走ることは特別になりました。ジョギングが流行っていますが、それだって健康のためが多く、意味なく走ったりはしないようです。自分自身のことを考えてみますと、急ぎの用事の際には自転車や車を使います。たまに電車に乗り遅れそうになつて走ると、まわりの目が気になつて恥ずかしくなるのも変ですね。

子どもと一緒にいると、走ることに抵抗がなくなります。それだけ「走る」ということは、子どもの自然な動きなの

でしょう。

*

今月の津守先生のお話、身につまされ
ます。我家の子どもは、娘12歳、息子8
歳と、もう大きいのですが、それでも、
下の子は特に、不安定になると、自分を
支えられない時があります。殆どは、母
親の私が他のことで手一杯、頭も一杯と
いう余裕のない時です。何を言っても、
すぐに泣いてしまつたり。そんな時は、
一緒に風呂に入つたり、いつもよ
りたくさんつきあつてあげると、気持ち
が落ち着くようです。あとから、もう大
きくなったのだから……とはげますと、
その年齢なりに自分ののり越えなければ
ならないことが、少しずつ理解でき、成
長しているようです。

ずい分冷静なことを書きましたが、実
際子どもが泣きわめいている時には、私
も興奮して怒ることもたびたびで、子育
て真つ最中は、パニックと反省のくり返
しです。

(K)

幼児の教育

第九十一巻 第五号

(一九九二年五月号)

定価四五〇円(本体四三七円)

平成四年五月一日 発行

編集兼発行人 本田和子

発行所 日本幼稚園協会

東京都文京区大塚二一一一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

印刷所 図書印刷株式会社

東京都港区三田五一一二二一

発売所 株式会社フレイベル館

東京都千代田区神田小川町三一一

振替口座 東京九一一九六四〇

電話〇三三三二九二一七七八一

●本誌購読のご注文は、発売所フレイベル館にお願いいたします。

●万一、落丁・乱丁などがございましたら、おとりかえいたします。

フレーベル館
特別企画

フレーベル先生の遺跡と
教育施設をたずねる

ヨーロッパ幼児教育視察

1992年7月28日(火)～8月8日(土) 12日間

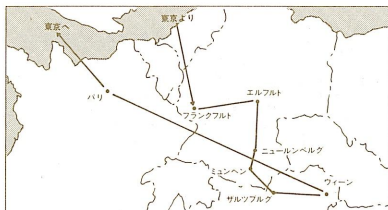
ドイツ・チューリンゲン地方→ロマンチック街道→ウィーン→パリ

●ごあいさつ

「フレーベル・ツアー」も今年で第13回を迎えることになりました。その間、「フレーベル生誕200年祭」「フレーベル幼稚園創設150周年」などの行事に参加し、また、東西ドイツの統一にも遭遇してきました。毎回、ご参加の先生方からご好評をいただき、2回、3回と参加されるファンの方もいらっしゃいます。今年は、幼児教育のルーツを訪ねるとともに、ロマンチック街道をバス旅行で南下し、後半はヨーロッパの伝統的都市の空気に親しむ企画といたしました。ぜひこの機会に歴史の薫り高きヨーロッパの風に吹かれてみてはいかがでしょうか？ お誘い申し上げます。

フレーベル先生ゆかりの地 チューリンゲン地方

- エルフト ●バードブランケンブルグ ●オーベルバイスマッハ
- バードリーベンシュタイン ●ローテンブルグ ●ザルツブルグ
- ウィーン ●パリ



旅行期間	1992年7月28日(火)～8月8日(土) 12日間
旅行代金	837,000円
募集人員	25名(定員になり次第締切) らせていただきます)
申込締切日	1992年5月31日(日)

企画：キンダーブックの **フレーベル館**

旅行：日本交通公社  運輸大臣登録
主催：**日本交通公社** 一般旅行業第64号

●お問い合わせ先

フレーベル館 ヨーロッパ幼児教育視察係
東京都千代田区神田小川町3-1
〒101 電話 03(3292)7781(代)

JTB団体旅行新宿支店 ヨーロッパ幼児教育視察係
(運輸大臣登録一般旅行業第64号)
東京都新宿区西新宿1-18-8 スカイビル4階
〒160 電話 03(3346)0181(月～金09:30～17:30)



くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社総括部(03)3292-7783(代)にお問い合わせください。

キンダーブックの
フレーベル館

3歳児保育のすべて

これ1冊で3歳児保育のすべてがわかる
現場必携の書

新幼稚園教育要領、新保育所保育指針の理念にそって、これからの3歳児保育の考え方、在り方と実際が説明されています。発達の考え方と見方、3歳児の生活の特徴、援助の仕方、指導計画の考え方と作り方、そしてポイントをおさえたQ&Aが3歳児保育のすべてを掲載してあります。

柴崎正行・関口はつ江・藤野敬子・阿部明子・吉村真理子 共編著
B5判・304頁・定価3,300円(税込)

新教育要領が望んでいる自主性を育てる保育に必要な援助の仕方と子どもを見る目を養う保育実践書。

年齢別保育実践シリーズ〈全5巻〉

このシリーズは幼稚園教育要領・保育所保育指針の基本にそって編集しました。現場の保育者、保育者養成担当の研究者の方々にとって「遊び中心の保育とは何か」は重要な課題です。この課題に具体的に因えるため、年齢別保育の実践例を中心に考察を加え遊びの発達が見通せるように工夫しました。 編集責任 東京学芸大学教授 小川博久



- 第1巻 0~1歳児の遊びが育つ 編集/小川清美
第2巻 2歳児の遊びが育つ 編集/野本茂夫
第3巻 3歳児の遊びが育つ 編集/平山許江
第4巻 4~5歳児の遊びが育つ 遊びの魅力
編集/河邊貴子・戸田雅美
第5巻 4~5歳児の遊びが育つ 遊びと保育者
編集/河邊貴子・戸田雅美

A5判 1~4巻 264頁 5巻 288頁 定価各 2,000円(税込)
全3巻セット(第3巻~第5巻)セット定価 6,000円(税込)
全5巻セット(第1巻~第5巻)セット定価10,000円(税込)

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社総括部(03)3292-7783(代)にお問い合わせください。

キンダーブックの
フレーベル館